

## 第35回夏期福音特別集会（1）

## 言靈なるキリスト——ヨハネ伝第1章1～18節

1988年8月19日

小池辰雄

世界的な詩 言靈 本当の光 聖名の中へと信入 最初に行行為があつた 恵信一如 在らしめ  
られて在る 詩「受肉のキリスト」

## 【ヨハネ1・1～18】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2 この言は太初に神とともにあり、3 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。5 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6 神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。7 この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信せん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の國にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信せし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 斯る人は血脉によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、實に父の獨子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『「わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます獨子の神のみ之を顕し給えり。

## ● 世界的な詩

この7月の始め、私は著作集第十巻の初校をやつしていました。この第十巻は多分秋に出来ます。また私は、この辰年から次の辰年——次の辰年は2000年です——この12年間に世界的な詩を書きます。そのために、時間の非常に切迫して来つつあることを、しみじみ



と感じました。これは是非とも書き上げなければならない。本当に世界的です。このためには、私は来年から打ち込まなければならない。

それで、この夏の集会は今回限りと決められました。今回が最後であると、これは独りで上からそう決められた。誰にも相談しません。

私は本当にみ言に従つて祈り込んだ。そうしたら、私の中に変化が起きた。内側から変貌した。私は非常に楽になつた。未だかつて知らない境地にはいりました。そうしたら、本当にすべるようには私はこの準備ができました。各集会毎に新しい讃美歌を歌います。

そういう最後の集会でありますので、皆さん、どうぞ始めから終わりに到るまで、私と一緒に、本当にみ靈たま、み言ことばの中に入つてください。サタンが何を言おうと一向差支えありません。キリストが勝つていらっしゃいます。主さま、有り難うございました。

アウグスチヌスの晩年、アッシジのフランシス、ザビエル、ああいう連中の靈の世界が非常に近くなりました。ルッターやカルビンではない。もうロマ書7章のパウロの叫び苦しみは抜けました。ロマ書8章だけになりました。私の中にはもはや矛盾はありません。私は、ダンテでもゲーテでもありません、東洋の小池です。

## ● 言靈

それでは、ヨハネ福音書第1章1節、

「言」はギリシャ語はじめことばで

### 「ロゴス」(Logos)

と書いてあります。ロゴスは、紀元前30年から20年頃のアレキサンドリアの、ユダヤ的ギリシャ的両方の学問宗教を知っている哲学者フィローというのが、旧約の真理とプラトン、アリストテレス——プロタゴラスから始まっていますけれども——その真理を統一しようという、そういう気持で哲学していた男です。それがこのロゴスという言葉を使った。そして、

「これは神的な存在だ」

とまで言いました。これをヨハネが、ヨハネの立場から、この言葉を援用したわけです。ヘブライ語でいうと、「言葉」というのは「ダーバール」という字です。ロゴスというギリシア語は、本当は言葉という意味ではない。むしろ理性です。非常に知的な理性的な方面からの悟りの意味を持つた言葉です。しかし、ヨハネが使つている時は、そのフィローの意味を福音的にしたので、同じロゴスという言葉でも内容は違うわけです。私は前に

と自分で訳しました。そうしたら、明治の初年に、

「はじめに靈言れいげんあり」

「はじめに靈言れいげんござる」



という訳があつたので、ああ面白いな、気持が合つたなあと思つた。今回は靈言でもいいけれども、ひつくり返して「言霊」と私は訳しました。キリストは

「神は靈なり」

とおつしやいました。もちろん、この「靈」は神の靈のことです。

「わが言は靈なり、生命なり」

と仰いました。「言が靈であり生命である」とキリスト自身がおつしやつた。ですから、このロゴスは靈言か言靈か、とにかくこの二つの構造において訳すのが本当だと思いました。言靈という言葉は、もう日本の初めの、古いところから有ります。靈と言とは分けてはダメなんです。よく、靈的な人が熱心に祈ります。神のみ言が、聖書のみ言が裏付けられていないところの靈的な祈りは危ない。そういう意味で、この言・靈は不可離の関係にある。十字架と聖靈それにこの聖言。もうひとつ有ります。行為。この四つは、ちょうど十字架の四辺のように離すことができない。

「ロゴス」というと、ギリシャ語では他に、「パトス」（Pathos）と「エトス」（Ethos）という言葉があります。「ロゴス」は知的なもの、義の世界。「パトス」は情の世界。「エトス」は意識的なもの。知情意というのがちょうどこれに当たるわけです。

それで、「言」はロゴスですけれども、ヨハネのこのロゴスは、このパトスとエトスとをみんな含んでいる。そういう、深いロゴスです。深い聖言です。

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。

「はじめに言靈があつた。言靈は神とともにあつた。言靈は神であつた」という。この素晴らしい三句。

「言靈があつた」

「あつた」「エーん」という字は不定過去で過去から現在にわたつて今もそうであるという」とです。これは存在ですから、在るということ。少し難しい言葉を使いますと、これは「エクジステンチア」（existentia）、「実存」「存在」です。

「それは神があつた」

と。神というのは神性、神の性を持つたもの。これは本質を言つてゐるわけです。言靈の本質は神的なものである。これはラテン語でいうと「エッセンチア」（essentia）になる。だから、「エクジステンチア」と「エッセンチア」と、それがノンに言われてゐる。

「神とともにあつた」

という、この「とともに」は、「プロス」（pros）というギリシャ語で、「に対して」という意味です。神に向かつて、あい対してということ。私はあなた方にあい対してゐる。これがプロスといふこと。

「言が神に対してあつた」

そうすると、これは単なる言でなかつた。話しかけである。話しかけに対しては答えるが



ある。ドイツ語でいうと「ヴォルト」(Wort)に対しては「アントヴォルト」(Antwort)がある。これが「対してある」ということ。本当の会話があるということです。キリストは神さまと本当の会話がありました。議論ではない。単なる話し合いでもない。語りかけ、呼びかけです。そういう動的な言葉である。エックハルトが

「神という字は名詞ではない、動詞だ」

と言いました。さすがにエックハルトだ。それで、私はそのエックハルトの言葉を

「神する」

と訳した。「神は神したもう」と。

それで、最初のその三つの言葉、もうこれで完璧なんです。そして、その言霊は神さまばかりではなくて、私たちに話しかける。これがキリストです。

## ●本当の光

3万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

断言です。聖書の言葉は本当に素晴らしい。圧倒される。

之に生命あり、この生命は人の光なり。

「ありき」も「あり」でいい。ヨハネ伝1章1節から18節は聖書の最も凄い所の一つです。これを本当に自分で默読身読し、瞑想し祈り、その中にはいつたら、あなた方は凄いことになる。「生命」はもちろん永遠の生命です。「ゾーエー」というのは死なない生命のことです。プシフェーではない。私はあなた方とこうやつて聖書を食らっているのが本当に嬉しい。もう、ここは天国です。

5光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

「悟らざりき」は、あるいは「勝たなかつた」と訳します。光が本当に暗黒に照ると暗きを光に変えてしまう。

私は内側から変貌した。こんな体験は初めてです。最後の峠を乗り切った。あとは、山頂に向かって歩いて行くだけ。もう谷はありません。こんなにも、楽しく明るい世界かと。何だか、聖書のみ言が一段と光つて来た。

「光」とはこういう字です。太陽から七つの線が発している。虹のようです。七彩の虹。キリストの十字架・聖霊の光は虹のことし。

「光」<sup>6</sup>神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。<sup>7</sup>この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。<sup>8</sup>

彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

「光につきて」ですけれども、まさに「つきて」というようなところで、

「洗礼のヨハネは素晴らしい、これは預言者の最後の者だ。けれども、天国の者は



ヨハネよりも大きい」

とキリストは言われた。しかし、キリストの前に殉道の死を遂げたヨハネの存在は、決して忘れることができない。パウロの前のステパノのことく。

生命だと光だと、そういう言葉がちょっと抽象的に見えても、非常に具体的な言葉です。聖書の言葉は絶対に抽象ではない。全部、具体性をもつていて。形容詞はない。全部、現在直説法です。それが本当の永遠の世界なのです。

<sup>9</sup> もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

この「真」という言葉が時々使つてある。キリストも

「我は真の葡萄の樹」

と言られた。日本語でいうと、「本当の」ということです。よくこの頃、若い人たちがすぐ「本当?」なんて聞くけど、あんな安っぽい本当ではない。これは「本当、本もの」ということ。「真理」という言葉がよく出て来ますけども、単なる理でない。あの「アレティア」というギリシャ語を「真理」と訳すのは私はあまり好きではない。私は「本もの」と訳す。本もので結構だ。「我は真理なり」は

「我は本ものなり」

ということです。キリストは

「我は本ものなり、生命なり、道なり」

とおっしゃる。聖書の御言は、読むことが直ちに祈りであり、直ちに現実であり、直ちに力である。「後で祈祷会しましょう」なんて本当は要らない。もちろん、この光は太陽の光以上の靈的な光です。パウロが復活のキリストの靈光に擊たれた。

### ●聖名の中へと信入

<sup>10</sup> 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。<sup>11</sup> かれは

己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

彼はユダヤに来たのに、選民ユダヤ民族はこれを受けない。今でも受けない。「キリストは預言者の一人である。パウロは間違った。キリストを信じて、救い主としたのはまちがつた」と、あいかわらず思つてゐる。

「兄弟たちに呪われても、私はこの同胞の救いを求めているんだ」と、パウロはロマ書9章で叫んでいる。「アナテマ」という。キリストは今でも十字架の上で、ユダヤ人からは「アナテマ」「呪い」にされている。呪う人は自分がだめになるだけのはなしです。

ユダヤ人はキリストを受けない。この「受けける」という字は「バラランボノー」という字で、花嫁を花婿が迎えて受けとるような意味の、そういう時にも使う言葉です。<sup>12</sup> されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあた



え給えり。

12節は素晴らしい。

聖名を信ず

とは直訳すると

## 聖名の中へと信入する

「主さま！」  
といふこと  
信じ入る  
み名の中へと信じ入る  
聖名は実名ですか  
私の初めは簡単だ

九

のではない。呼び入るんです。  
ちすじ  
ねがい

13 斯る人は血脉によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。

キリストの聖名を受けた者は、本当にその通りです。生まれつきの我々は、キリストを受けとることができない。一遍キリストの前に平伏すまでは。人間的な熱心でいくら呼んだってダメなんだ。一遍この聖書の現実に、聖言の前に降参するまではダメだ。意味ではない。

「参りました！」

と云つて  
全存在をそこには平伏すと  
今度はギリ亞トに吐ひかげる」とかでござる

## ●最初に行為があつた

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、  
この「宿る」という字は「幕屋を張る」という字です  
「言靈は肉と成りて我らの中に幕屋を張り給えり」

ハウロは私たちの身体そのものを「幕屋」と言いました。それから二三人集まつて、主さまをまん中にしている事態が幕屋（三角垂体の構造）です。十字架の柱が立つていて、底面のa、b、cの各人は皆、十字架と縦の関係が立つていて、この縦の関係がなかつたら、このa、b、cはダメなんです。いわゆる三角関係になる。それぞれ、主に在つて比較を絶したものが、このa、b、cです。人格は比較してはいかん。一対一の関係です。そうすると、この三角は円現して円になつてしまふ。丸くなつてしまふ。

ゲーテが『ファウスト』の中で、

「最初と言があつた

という句を、その頃のキリスト教がいわゆる言葉の宗教になつていてダメだ、いわゆる教



会の信仰が空念佛だと、ゲーテはそれを嘆いて、

「最初に思念おもい（Sinn）があつた」

と訳した。まだうまくない。

「最初に力（Kraft）があつた」

だいぶいいなあ、でもまだちょっとと、と言つて、この力が現れるものは行為（Tat）だあると。

Im Anfang war die Tat.

「最初に行為があつた」

と訳して、やつと気がおさまつたと、ファウストをして言わしめている。もちろんゲーテの気持です。

Tat um Tat

「すべては行為である」

というような言葉もファウストの中に出でてくる。アブラハムも、「ウルから、ハランから出て来い」と言われて、「はい」と言つて従つたのは行為なんです。これが信仰です。イサクを捧げるのも行為です。出エジプトの恵みをしたのも、モーセを通して成したのも、神の行為なんです。それから、モーセに十戒が来た。十戒という言葉が来た。恵みの行為の方が先だつた。

が先だつた。

「太初はじめに行行為あり」

なんです。天地創造という行為があつた。そして、

「これをよしと言ひ給えり」

と。「ああ結構だ」とおつしやつた。後に言葉が来ている。マルチン・ルツターが、

「信仰プラス行為ではないぞ、信仰だけだ」

と言つた。これは、ユダヤ教に対して、パウロがガラテヤ書でそのことをはつきり言つてゐる。

「信仰のみだ。信仰によつて義とされる」

と。「よしとされる」という。それはそれ自身、非常な凄い真理です。信仰プラス行為なんていうことではない。そんなことでもつてやつて、「信ずるは易しいが行為は難しい」なんていうのは、「言うは易く行うは難し」なんてのと同じことだ。

「そういう二段構えをいつまでやつてもダメだ。信仰だけだよ」

と。「信仰だけだよ」と言つた。パウロもルツターも、最も行為の人だつたではないですか。これが本当に、「信即行」の世界なんです。どんなに行為が破れていてもいい。即の世界にこなければ。いいですか。我々はどうせ破れ器だよ。しかし、これが本ものであればいい。二段構えではない。一如の世界です。「言行一如」です。十字架が土台です。聖靈が一切を包んでください。

「アブラハムより我は先にありしなり」



という言霊的存在であつたキリスト。キリストはマリアをとおして現れた。これが  
「肉となつた」

ということ。我々と同じ、食べたり飲んだり寝たり、笑つたり泣いたり、という人になつた。  
「我々と同じ弱さを持つて思いやることができるのはそういうわけだ」と、ヘブル書の4章に書いてある。キリストは本当にどん底から私たちを思いやつてくれます。

この頃日本には思いやりが無くなつた。この頃の子供は自分のことばかり考えて、人に迷惑をかけても一向に平気な、こうすれば人に迷惑になるなんて思わない。子供が悪いのではない。教育が悪い。親、先生。特に母親が大事だ、教育は。責任はこっち側にある。我々の側にある。コマーシャリズムにすっかりひつかき回されている。なんですか、このマンガ文明は。ドイツ人が言つた、「一体、日本人はどういうんだ、こんなものばかり読んでいて」と。読んでいるのではない、あれは見てるんだ。作文を書かせるところに文章も書けない。漢字は知らない。漢字は世界最高の文字です。こんな素晴らしい文字をいい加減にしている。

### ● 恵信一如

我々の間に幕屋を張られた。我々の間に一緒に住んでくださる。宿つてくださる。それは私たちを救わんがためです。これがいわゆる「受肉」という。雲の上の人はではない。一緒にペテロやヤコブやヨハネとご飯を食べたり、非常に仲良く暮らしてくださつた。故郷の人は入れられないので、ガリラヤに来てしまつた。ナザレから出てしまつた。

### 「預言者は故郷に入れられらず」

という。いわゆる肉的に近しい人が一番難しい。「家の者は敵だ」なんてキリストはあんなことまでおつしやつた。

我らその栄光を見たり、實に父の独子の栄光にして恩恵と眞理とにて満つて、<sup>ひところ</sup>めぐみまこと

栄光というのは、父なる神を表現した、身体で現じた、その姿が栄光です。

<sup>15</sup> ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『「わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』<sup>16</sup> 我らは皆

その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。

「充ち満ちたる」「プレローマ」です。この「充ち満ちたる」という言葉はよくパウロの書簡にも出て来ます。

### 「恩恵に恩恵を加えらる」

### 「カリン・アンティ・カリトス」

とは素晴らしい言葉です。「加えらる」という言葉はない、ただ「恵みに恵みを」と書いてある。ドイツ語でいうと、

「グナーーデ・ウム・グナーーデ」(Gnade um Gnade)



という。恵みに圧倒される。実はキリスト自身が恩恵なんです。

### 「恵信一如」

という。恵みを受けとるということが信ずるということ。この「信」という字は「受」といつてもいいくらいです。これが一如です。

### 「恵みにより、信仰によりて救われたり」

と。恵みがもちろん先です、上から来るのが。キリストが我々の間に幕屋を張ったという、この事実が恵みの第一歩である。そして、彼が地上でもつて、この福音書が伝えているような聖言を伝え、かたづばしから人を助けてしまった、救つてしまつた。死人まで甦らせてしまつた。もの凄い「言行一如」の世界です。これが恩恵の現象体です。キリスト自身が恵みそのものです。

### ●在らしめられて在る

<sup>17</sup> **律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。**

律法は、実はユダヤ人はとりそくなつた。律法は本当は隠れたる福音だつたんです。

「汝殺すなかれ」

ではない。

「お前は殺人はしない」

という言葉です。あの本当の内側の意味は

「私が神だから、お前は殺人なんかできない」

という言葉です。「ロー」という否定詞は「アル」という「すべからず」ではなくて、「そうではない」という断定的な否定詞です。少し婉曲に訳すと、

「汝は殺人せじ」

ということ。「せじ」でもいいが、本当は「しない」でいい。

「我はエホバなり」

と後ろの方にちゃんと書いてある。隠れたる福音なんです。その隠れた福音を、神さまの我々を信じてくださるその恵の言葉、気持を本式に受けとつて、山上で語つたのが、キリストの「山上の大告白」で、モーセの律法をはるかに越えたところの言葉です。ところが、ユダヤ人は「モーセ、モーセ」なんだ。

<sup>18</sup> **未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。**

素晴らしい言葉です。私は大好きな言葉です。神の懷にいたキリストだけがこれを現した。私たちはキリストの懷に入つて、本当にキリストを体現したい。

マルチン・ブーバーは「はじめに言あり」を

「はじめに関係あり」



なんて言つてゐる。関わり、関係がある。上からの関係づけ。それはひとつのがつた取り方ではあります。

「在り」という存在。本当に

「ザイン」（Sein）

しているという。これはハイデッガーが言つてゐる。我々が存在してゐるのは、「ここに投ぜられてある」

「ダーザイン」（Dasein）

という。ドイツ語でいうと、ザインがなければダーザインはない。「我在り」とは言えない。デカルトの「我思う故に我在り」なんてとんでもない。あれは観念なんだ。

「神いましたもう、キリスト在りたもう。故に我是在る」ということ。むしろ

「在らしめられて在る」

ということです。だから、本当に在らしめられて在ることを、自己を投げ出しているその事態を

「ゲラッセンハイト」（Gelassenheit）

と言つた。ゲラッセンハイトという言葉は、仏教的な言葉でいうと放下です。全部、自分を任せてしまふ。我々は、本当にキリストに自分を任せてしまつてゐるが、キリストという存在に対しても任せていれば、これが本当のダーザインになる。本当の在らしめられている在り方になる。私たちは、この言霊によつて在らしめられて在る。言・霊に在らしめられて在る。

それで、この聖言と聖霊は絶対に離してはいけないということ。聖書が土台になつてないような祈りはしないことです。霊的であると、サタンが来ます。しかし、恐いことは一つもない。キリストに連なつてください。こちら側は弱虫で一向差し支えない。

「我れ弱きとおに強し」

と、パウロが言つた、その通り。コリント後書12章です。パウロを読むと、こんな人がいるかと思うくらい素晴らしい。素晴らしいというのは、その福音を受けとつてゐるところの、内容の有機体的な構造の素晴らしいです。キリストを除いては、パウロは第一人者だ。選びの器だ。これがキリストに反抗してゐた張本人ですから。復活のキリストに、

「なぜ、私を迫害するか！」

と、人間的熱心でやつてゐたから、ひっくり返された。キリストの熱心が、神の熱心が、聖言の権威が来てないと、そういうことになる。

●詩「受肉のキリスト」

パウロを読めばパウロとなり、ヨハネを読めばヨハネとなり、ペテロを読めばペテロと



なり、ヤコブを読めばヤコブとなる。自由自在になる。

未だ表現できなかつたことを、私はこの詩で表現しなければならない。もう、人生の最後の峠を乗り越えたから、私は

「本当に主さまありがとうございました」

の他なものない。後は嶮路を登るだけ。ダンテを塞いでいた、あの三つの動物、あんなものはもう怖くなくなつた。ダンテは地獄を通らなければならなかつたけれども、私はキリストの聖靈聖言にすつかり変貌させられたから、新しい次元に入つたから、何にも恐いものはない。不思議でしようがない。私はひとつも力んでいません。力んで、できることではないですから。私はこの境地で皆さんとこの集会ができたことを本当に感謝しています。

それで、一つ新しい讃美歌をご紹介します。ここに、私は「天言」と書きました。私の号は全部「天」が上に付いているが、これは、新しい光を発していますから、間違えないでください。キリストの光ですから。

A51 受肉のキリスト（1988年8月5日作 歌調・讃美歌538 「過ぎゆくこの世」）

- |           |                           |                            |
|-----------|---------------------------|----------------------------|
| 1. 永遠の太初に | 言靈 <small>ことだま</small> 神と | 言靈 <small>ことだま</small> ありき |
| 2. 言靈の性   | 共に在りけり                    | 神性 <small>かみ</small> にてあれば |
| 3. 言靈 生命  | 成り出でしめぬ                   | よろづのものを                    |
| 4. 光は闇に   | うち勝ちたるぞ                   | まことの光体 <small>ひかり</small>  |
| 5. 言靈 肉と  | 世に現はれぬ                    | 世はそを知らず                    |
| 6. 彼の聖名をば | み民も受けず                    | わかれらの中に                    |
| 7. 神の子たるの | 張りて宿りぬ                    | 神の子たるの                     |
| 8. 父なる神の  | 信する者は                     | かくてみ神の <small>まこと</small>  |
| キリストこそは   | めぐみを受くる                   | 恩恵と真法 <small>まこと</small>   |
|           | 独子イエスは                    |                            |
|           | 体現したり                     |                            |
|           | みふところなる                   |                            |
|           | 神の顯現！                     |                            |

天言記之

